



紫様冬眠中

成人
向。

境界遊戯。式の肆

紫様冬眠中

成人
向。

境界遊戯。式の肆

「今までのあらすじ」

……………い、今まで起こった事を完結に話すぜ。

「誤った紫の記事を新聞に掲載してしまった文が、

紫にお仕置きをされていたと思ったら、いつの間にか攻受が逆転していた！
ついでに永琳や藍までもが紫を犯しにかかっていた！」

な…何を言ってるか分からねーと思うが、

とにかくみんな、紫が愛しくてしょうがなくなっていたんだ。

少女臭とか加齢臭とかそんなチャチな物じゃ断じてねえ、

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

境界遊戯。 式の肆 紫様冬眠中

かんのいずか

「あ……ん……！ いっ……いい加減にしなさいよ藍っ！」

も、もう……ずっと相手してやってんだから……それに……まだ……く、薬の効果が……ひあっ！」

「だから止めないんじゃないですか。紫様……私が今までどんなに、貴女の我儘を我慢してきたと思ってるんです？ 少し位、私にだって好きなようにさせて下さいよ」

「……やあ、駄目っ……！ そこ……は……！」

そろそろ日も落ちようかという夕暮れ時。

紫の寝室からは、藍と紫の情事に耽る声が聞こえてきていた。もう長いことこの状態が続いていて、なかなか終わる気配はない……

文は手持ち無沙汰に髪を弄りながら、襖の前でそれが終わるのを待っていた。

「まったく……いつ終わるのよ……！」

紫から受けた『お仕置』で、ちん〇を生やされたままの文であったが、何度か人中出しすれば治る為、ずっと紫の身体が空くのを待っていたのだった。

どうせだったら、自分をこんなにした紫本人に出して治してやりたいし、二度紫とエッチして、すごく良かったという理由もある。

今すぐ二人の所に乱入して、紫を犯してしまいたい所であったが……。まだだ。まだいけない。

前回の『ゆかりんを罠にハメて、永琳と一緒にエロエロ

する計画』に協力する代わりに、藍にも良い思いをさせてやる約束だった。

藍は、今までの紫に対するうっ憤が相当溜まっていたらしい。永遠亭から帰った後の、薬でフラフラになった紫をここぞとばかりに『愛して』あげているようだった。終わるまで邪魔をするなという約束だったし、それに……

「あ、あの……！」

か 細く、可愛らしい声が廊下の奥から聞こえた。見ると橙がオドオドとした様子でこちらを見ている。

そう、橙を部屋に入らせないのも文の役割だった。

「あの、文さん……まだ終わらないんですか？」

「う……うん、ごめんね橙。まだみたい……！」

申し訳なさそうに聞く橙に、文もまた申し訳なさそうに応える。良い言い訳も思いつかず、なんとなくはぐらかす事しか出来ない。

橙は心底困った様子で、俯いてしまう。

「だってもう、もう三日経ったじゃないですか……！」

そう、もうこの状態で三日も経っているのだ。実を言う

と、あの薬はかなり長い間効果が切れないらしく、藍も調子に乗って止められなくなっているようだ。それほど紫の身体は魅力的だったのだ。薬が切れる前にまた紫とエッチしたいと思っていた文も、同じく痺れを切らしていたのだが……

「藍しゃまに、暫く他のところにお泊りしててねって、言われて、永遠亭とか、白玉楼とか……ひっく、色々、お泊りさせてもらったんです……でも……でも……ずっと心配で……だって藍しゃま、へんだったから……！」

「う、うう……！」

自分が持ち掛けた話だったからこそ、余計に申し訳無かった。こんな純粋な心を持った子に、悲しい想いをさせてしまつて……

「ひつく、ひつく……だったら、藍しやまと紫しやまは、何をしてるんですか……？ どうして私だけ部屋に入れて貰えないんですか……？ ううっ……なんかへんです……！！うわあああん！！！！」

恐らく橙は橙なりに『中で何かイケナイ事をしている』というのは理解しているのだろう。そう思うと胸が痛い。しかしどう説明していいかも解らない。

「え……えいと……」

文が悩んでいると、橙の泣き声が聞こえたのだろうか、するすると襖が開き、中から藍が出てきた。

勿論、今まで何かしていたなどと悟られないように、着衣の乱れも無いいつもの様子だ。

「終わったわよ」

「藍しやま！？ うわあああん！！」

お互いの姿を見つけた藍と橙は、同時に駆け寄るときぎゅつと抱きしめあつた。

「橙……！ おおよしよし、寂しかったねえ！」

「寂しかったです、うっ……藍しやま何かへんな匂い」

藍の狡猾さに半ば呆れながら、これで大丈夫だと文は安堵の溜息を漏らす。それにしても長かった。

二人を横目に、そつと部屋の中を覗く。見ると、全裸の紫が布団で蹲りながらピクピクと身体を痙攣させていた。いった直後の、身体が敏感になってしまつてどうしようもない状態のようだ。

それを見て、みるみる文のテンションが上がっていく。

ふふ……橙には申し訳ないけど、今から存分にあげてあげてね、待っててよ紫！ 後ろ手に縛り上げて河童から大量にせしめてきたエロ玩具で、泣くまで犯しつくしてやるんだから！ 浣腸して放置してやるのもいいわね、上手に私のをしゃぶってくれたらトイレに行かせてやってもいいけど、どうしようかしら？

それから、その様子を写真にも映像にも全部収めて、泣きながらやめると懇願するのも無視して、そのまま博霊神社で大上映会を開いてやるわ！ その時紫はどんな顔をしてくれるのかしら？ 皆の前で泣いちゃうかしら？ 薬のせいで、恥ずかしいのも気持ち良くなってイっっちゃうかしら？ そしたら皆が見てる前で存分に犯してあげるわよ！ いいじゃない、紫のそんな姿見てみたいわ！ 気が狂いそうな屈辱よね！ それからそれk

「さて、そういうわけなんで、お引取り願えるかしら」

「……はあ！？」

そこで、突然の藍の我俣発言に、文は妄想から現実の世界に引き戻される。

「ちよつと今何て言つ……え、何ですって？」

「ちよ、ま……だって、私ずつと待ってたのよ？ ひどいじゃない！」

「だって橙もいるし、もうこれ以上紫様は無理ですよ」

「ひ、ひどい……自分は今まで散々しておいて！ あんた、一見真面目そうな性格してるけど、本当にズルい性格してるわね！ 狐つて皆こうなの！？」

「あらあら、天狗にそんな事言われたくないわね」

「やめて————っ！」

二人の言い争いに、橙が大声で叫ぶ。

「藍しゃまのこと悪く言うのは、やめてください！」

それに紫しゃまがひどい事されてたのは、私も知っていませんでした！ 藍しゃまも自重してください！」

『うっ……！』

橙に涙目でそう言われては、二人はもう黙るしかない。

文も橙の気持ち思うと、徐々に気分が萎えていった。

確かにこのまますぐ紫の部屋でアレコレするのは、気が引ける。

「し、仕方ないですね……今日のところは帰りますけど、また、来ますから……！」

文はそう言い放つと、渋々帰っていった。

まあ良い。今効いている薬の効果もまだ暫くは消えない筈だ。またの機会でも問題は無いだろう。

文はどんよりと曇った空を飛びながら、今度は紫に何をしてやろうかと、またもや妄想の世界に入っていくのだった。

一方、藍はというと、橙に怒られたのがじわじわ効いてきていた。

「自重しろ、か……」

暫くは紫に何かするのは止めておこう。

橙の前では立派でありたいという、調子の良い考えを持っている藍としては、今だけは反省せざるを得ないのであった。

それに、そろそろ紫は………

* * * * *

「ちよつとおおおお!! どういう事ですかこれ!？」

「いや…まあ…ごめんなさいね」

藍と橙に追い出された日から暫く経って、再度八雲家を訪れた文だったが、予想外の出来事に啞然としていた。

「と、冬眠ってどういう事よ! 私まだ何もしてないんですけど!？」

「私もそろそろ時期がなく…なんて思ってたんですが…すみませんね」

思えば、既に冬の入り始めだった。そろそろ紫の冬眠の時期だという事を、文はすっかり忘れていたのだ。自分の不甲斐無さに、唇を噛み締める。ずっと我慢していたというのに…。

「ううう…私のこの溢れんばかりの性欲を、一体どうしろと…。あゝん紫いゝゝ!」

そこで藍は、少し考えるようにして、すぐに笑みを浮かべた。

「そうねえ…そんなに紫様の事好きだったら、眠ったまま何かしちゃってもバチは当たらないんじゃないかしら」

「へ?」

一瞬キョトンとしてしまった文であったが、直ぐに藍の言っている事を理解する。つまり…。

「え…いいんですか? ほ、本当に? 藍さんてば、後でお仕置されても知りませんよ?」

「まあ、起こさない程度にだったら、悪戯しちゃっても良いんじゃないかしら? どうせバレないでしょうし」

「なるほど…それだったら…。ていうか、貴女本当に紫の式なんですか?こんな悪い事…」

「あら、気が進まない? 私としては、面白いから全然良いんだけど」

「いえやらせて頂きます」
文は即答した。

* * * * *

「んゝゝゝ、本当によく眠ってますね。しかも全裸で」

「ああ、それは先日私が脱がせました」

「藍さん…さては、今までも紫の冬眠中に何かしてましたね?」

紫の寝室。橙の留守を狙って、二人は紫でナニかしようと思考を巡らせていた。

流石に寝ている間に犯すのは気が引けるし、第一、反応が見られないのは楽しくない。精々、存分に辱めるような事をして写真に収める位か…。いや、それでも十分に楽しめる。起きてからその写真を見せられた紫の反応を想像して、二人は思わず顔をニヤけさせるのだった。

橙さえいなければ、藍も後ろめたい気持ちは薄れてしまっているようだ。

「藍さん、ちゃんと写真撮っておいて下さいね」

「解ってますよ」

紫はその、ムチムチとした良い身体を惜しげもなく晒している。久しぶりの紫の身体だ、十分に堪能してやろう。

まずはそつと、その大きな乳房に触れてみる。文の手には収まりきらない程の大きさだ。

むにゅんむにゅん。

弾力があって、それでいて肌はきめ細かく柔らかい。満足するまで胸を揉みしだき、感触を楽しみ終わると、文は早速イチモツを取り出した。パイズリなんかもさせてみるも良いが、文はもつとしてみたい事があった。

「さてと……実は私、紫には一度啞えて貰いたかったんですよね」

今まで一度も口ではして貰っていなかった為、紫の口内の感触に興味があった。

そろそろと、いきり立った自身を紫の口に近づける。

「おおっ？」

ふ……と小さな寝息が先端にかかる。これはなかなか、興奮するものだ。ふにふにと唇の感触を楽しむと、そつとそつと、亀頭をその口に滑り込ませた。ぬちゅ……。

「うわっ、ぬるっとして……気持ち良い……！」

たまらずズブズブと腰を進め、喉の奥の方までねじ込んでしまう。起きていたならば絶対にさせてくれないような事だ。存分に楽しませて貰おう。

藍曰く、『永琳特性の〇〇薬を飲ませてあるから、ちょっとやそつとでは起きない』との事だ。……その薬の成分は……怖いからあまり聞きたくないな。

まあ、そういう訳だ。少々荒くしてしまっても大丈夫だろう。文は徐々にストロークを開始する。

「んっ……ふ……っ」

腰を動かす度に、紫の鼻から苦しそうな息が抜けて出てくる。それがまた文の興奮を掻き立てた。紫の頭を押さえ

つけ、喉奥に何度も打ち付ける。

「ぐ……！ う、ぐ……ん……！」

喉を突かれて出る苦しそうな呻きも、文の気持ちを高ぶらせる効果しかない。

「あ……はあ……紫い……私、もう……」

今まで随分溜め込んでいた為か、文は呆気なく達してしまふ。文の身体がなびクンビクンと痙攣すると、紫の口の中にどくどくと精液が注ぎこまれ、そして……

「……んくっ……」

「うわっ、飲んでる！ すごいっ！ 絶対、起きてたら飲んだりなんてしてくれないもの！ うわ……感激！」

「口の端から精液が垂れてるのも、またエロいですね……（パシャパシャ）」

藍も夢中でシャッターを切る。

「ねえ藍、これからも時々来ていいでしょ？」

「橙がない時だったらいいですよ」

「やったー！ 冬って寒くて嫌いだったけど、こんな楽しみがあるんだったら悪くないわ！」

「まったくですよ。これがなかったら私、ストレスで死んじゃいますもの」

* * * * *

それから、どの位経っただろうか……。

冬の間文は紫の所に何度も通い、自分の欲望を発散させていった。



当然、回を増すごとに行為はエスカレートしていく。文達は「寝ている間に出来る、あらゆるプレイを楽しむぞ！」と相意気込んでいた為、紫の身体は何度も何度も屈辱的な行為を受け入れる事になった。

寝ている間に犯すのはどうも……と最初はやや遠慮がちな文も、今となっては遠慮も何もない位、行為に勤しんでいた。とは言っても、まだちん〇が治る程はしていないが……。

最近では紫が外の世界から持ってきた、様々な衣装に着替えさせて写真撮るのに夢中で、紫は露出度の高い恥ずかしい衣装や、外では「セーラー服」だとか「体操着」だとか言われている衣装を着せては写真に収めていた。

どういう場で着るものなのか、細かい事は解らなかったが、どことなく紫の年齢に不釣り合いなその姿は、存分に文の扇情を煽り立てた。

しかし当の本人は、そんな屈辱的な仕打ちにも、意識がない為気づかない……。

* * * * *

そうしている間に、日々はどんどん過ぎ去っていった。梅の花が咲き始めた頃、藍はふと主人の目覚めが近い事を察知し、文にある提案をした。

「文さん、そろそろ紫様の目覚めが近いみたいです。起きないようにする薬も、そろそろやめてあげた方がいいかもしれないですね」

「えっ？ ……それは…残念ですね…」

「そこですすね。とっておきのシヨールをご覧に入れましようかと……」

「？」

「今回は文さんがいたから、色々楽しめましたけれど、いつもはちよつと違う楽しみ方をしたので…。ああ、少々ヒドいかもしれませんが…引かないで下さいね？」

「えっ……え？」

藍の言っている事がイマイチ理解できず、文は首をかしげる。一体何をするというのだ。

暫くして戻ってきた藍の背後には……

「！」

何人もの人間の男達がぞろぞろと付いてきていた。

その男達の目は空ろで、どことなく心あらずといった感じだ。

「あの……藍さん、これって……」

「冬が来る前に貯め込んでいた人間達なんですけど……薬でちよつと、ね」

「また永琳さんの薬ですか……。でも……これは……」

思わずゴクリと生唾を飲み込む。

この男達が全員で、紫を……。藍も随分とヒドい事を思いつくものだ。今までも寝ている間にこんな大勢に犯させて、それを楽しんでいたというのか。

しかしそんな文の啞然とした様子に気にも留めず、藍は平然として男達に命令を下す。

「じゃあ皆、まずは紫様にご挨拶でもどうぞ。存分にかけちゃって下さいね」

藍のその一言で、男達はイチモツを取り出し、それを近づけるようにして紫の顔を取り囲んだ。

男達もまた、一種の催眠状態か何かのようで、自分の快樂とは無関係に、ただ機械的に藍の命令に従っているだけのようであった。

シュツシュツシュツ。

作業でもするかのように、一定のリズムでモノを扱き出す。快樂は通常通りに感じる事が出来るらしい。息を荒げ、紫の頬に、おでこに、唇に、先端を押し付け、先走りの液を擦り付けていく。

「う……わあ……」

あまりにも卑猥な光景に、文はムラムラきってしまったのだらうか、もじもじと身体を揺すらせる。

そうか、藍はいつもこんな事を……。見ると、嗜虐的な笑みを浮かべている藍がいる。普段は真面目で従順そうに見えるが、流石に紫に仕えているだけある。案外エグい性格をしているのだった。

「ぐ……うっ」

よほど溜まっていたのだろうか、男達は小さく呻くと、次々に射精していく。その量はとても多く、今日はいつもの衣装を着せられていた紫であったが、顔だけでなくそのお気に入りの服までもが精液で汚されていく。

「エ……エ口いですね……！ 私の征服欲がどんどん満たされていきますよ」

「うふふ、実は更にとっておきの衣装があるんです。ほら貴方達、紫様の服を脱がせて、着替えさせて頂戴」

その一言で、男達は即座に紫の服を脱がし始める。随分従順に命令を聞くものだが、人間ごとき操るのはそ

う大層な事でもない。この者達もまた、藍の良いように扱う玩具のようなものなのだろう。

藍が筆筒から水色の服を取り出し、男達に手渡す。

「これはですね、向こうの世界で『園児服』と言われる、幼児に着せる為の服なんですよ」

「ほー、それはまた犯罪的な……！」

「紫様にはそれはもうお似合いになると思って、大事に取っておいたんですよ。冬は長いですからね。何十年も、どんな新しい楽しみ方があるのか、ずっと考えてきましたから。……あ、もう終わったみたいね」

紫の『お着替え』が終わったらしい。

文は振り向き、園児服とやらに着替えさせられた紫を見て、なるほどと把握した。サイズが小さいせいもあるのだが、確かに子供が着る為の服に見える。名札にはひらがなで『ゆかり』と書かれてあり、これはなかなか、そそものが……。

「じゃ、紫ちゃんはまだ小さいから、優しく犯してあげてね」

早速、男達は紫を起き上がらせて座らせると、両手を掴みイチモツを握らせるようにして扱き始めた。

両手が使えない余りの男達は、口へ、髪へ、胸へ、ぐりぐりと擦り付け、徐々に自身を硬くさせていく。幼児の衣装におよそ不釣り合いなその光景に、文も興奮を隠せないのであった。

そして十分に硬さを増した一人が、紫の短パンを横にずらし、自分の上に座らせようとする。他の男達も手伝い、紫のアソコをあてがう様にして徐々に腰を落とさせていき……。



見る見るうちに、紫の秘部に男のものが埋まっていく。ずぶ……ずぶ……。既に文のもので十分にほぐされたそこは、容易くそれを受け入れてしまう。

「ふ、うろう……んっ」

紫の口から、少し苦しそうな声が聞こえた。

続いて、男がゆるやかにピストンを開始すると、はあ、ああつ、と小さく喘ぐような声が漏れ始める。

眠っているにも関わらず、ナカを抉られて感じてしまっているのだろうか。

「あら、いやらしい夢でも見てるのかしら？」

藍が紫の顔を覗き込む。頬を赤らめながら、はあはあと息を荒げている様子は、とても眠っているようには思えなかった。

「園児のくせに感じちゃうなんて、いやらしい紫ちゃんですわ〜」

はちきれそうな園児服の上から、藍がむにゅむにゅと紫の胸を揉みしだく。ぎゅつと押し掴みにすると、乳首の突起が浮き出て、そこも硬くなっているのがよく解った。

「んっ、ん……ふ……」

男がピストンする度に、紫の身体がゆさゆさと揺れる。文はその光景を、しっかりと写真に収めていく。寝ている間に園児服を着せられ、大勢の男達に犯される紫……

たまらない！

「できたら動画で保存しておきたかったわね……『紫ちゃん、はじめてのお遊戯』ってタイトルで売り出したら良いと思うんだけど」

「くすくす、香霖堂にでも置いて貰えば売れるんじゃないかしら」

「あ、それ良いわね！ 園児服だけじゃなくて、もっと色々としリーズにできそうね」

藍が持っている外の世界の衣装は、非常にレパートリーが豊富であった。

「だったら、もっと面白い衣装も持ってるわよ」

「本当？」

一体どうやって集めているのだろうか。藍はまた筆筒の中から、何か布切れのようなものを取り出す。しかしそれは、『衣装』と呼ぶには余りにも心もとないものだった。

「ん？ 何それ……」

「外の世界では、エロ水着って言われてるそうですよ」

「へえ、水着にも色々あるんですね。というか、エロッ！」

その水着は殆ど生地が無く、最低限の部分を隠す程度の面積しかなかった。いや、それでもまだ足りない位だ。

少し動けば、乳首や性器も丸見えになってしまうような程だ。

「ほらほら貴方達、次はこれに着替えさせて！」

そして……

「おおおおおつ、これは……！」

『エロ水着』に着替えさせられた紫を見て、文は興奮を隠せない様子で、藍からカメラを取り上げると入念に様々なアングルで写真を撮り始める。

外の世界の人間達は、一体どれだけ変態なんだ！

着せる前は、乳首と秘部をギリギリ隠せる布はあるように見えたが、いざ着せてみると少しズレがある為、周囲か



A

ちかり
ちかり
ちかり

ちかり

ちかり

ちかり

ちかり

ちかり
ちかり

ちかり
ちかり

ら軽くはみ出している。

「これは良い……！ すごく良いものですわね！」

「気に入って貰えたみたいで良かったわ」

正直、エロいなんてものではない。

確実に全裸よりも恥ずかしい……。こんなものを着ている写真を撮られたのだ、もしかしたら一生紫の事を揺すれるんじゃないか？

「さあ皆、ガンガン犯しちゃって！ 紫様はこゝんなもの着ちゃう痴女だから、何したって良いのよ？」

藍の言葉で、先ほどより一層興奮した男達が、紫に襲い掛かる。その行為は容赦なく、口へ、膣へ、肛門へ、穴という穴へ挿入を開始する。

「あつ待って！ アナルは私専用なんだから！」

肛門へ挿入しようとした男を、文は力づくで止める。前回処女を奪ってやったココは、他の人には譲りたくない。

「藍、いいでしょ？ 混ぜて」

「勿論ですよ」

「よし！ 犯る！」

待ってましたとばかりに、文が参加する。

膣内に挿入し始める男の動きに合わせて、文も紫のアナルに先端をあてがう。それから男の動きに合わせて、同時に奥まで貫いた。

「ああああ……！ キッツい……！」

入り口のキツさに、文の男根がぎゅうぎゅうと締め付けられる。膣内にもモノが入っている為、余計キツくなっているのだ。

しかし、何度も出し入れすればこなれて来るだろう。文は無遠慮にガンガン腰を動かす。膣とは違うこの感触

もまた、とても気持ちが良いものだ。このまま奥まで突いて、ナカで出してやろう……。

などと、文が思考を巡らせているその時だった。

「ん……あ……？」

パチリ、と紫の目が見開かれる。

一瞬、文の動きが止まるが、男の方は構わず腰を動かして続けている。

ズコ、ズコ……

「……………」

最初はぼやんとしていた紫だったが、徐々に状況を把握していき、表情が変わっていく。自分が大勢の男達に犯されていると理解した瞬間。

紫は絶叫した。

「あ……あああああつ！？ 嫌あああつ何してんのよアンタ達っ！ 痛いっ！ 抜いてよ馬鹿あ！」

「おはよー、紫♪ 大丈夫よ、またすぐ気持ち良くなるってば。入れたばっかだからまだ痛いかもしれないけど……」

痛がる紫を、文は待ってましたとばかりに、ぎゅつと後ろから抱きしめる。藍から見たら暴れないように押さえつけているようにも見えたが、紫はそもそも薬がまだ効いていてそこまで力を出せない。文は急に意識を取り戻した紫が愛しくなり、思わず抱きしめてしまったのであった。

「文っ……！ また貴女の……！ もう、絶対に許さな……」

「紫様、落ち着いて下さい」

「んんんっ！」

ふいに藍が紫を振り向かせ、口写しで何かを流し込ませた。くちゆくちゆと満足するまで舌を絡ませると、口を離す。

「ふは……」

「けほっ……！ 藍、何を……」

「もっともつと気持ちよくなるお薬ですよ」

「……あ、貴女まで……！ つぁあ！」

急に文と男の動きが激しくなり、紫は思わず気を持っていかれる。

「藍グッジョブ！ 責任持って貴女の『紫様』をイかせて差し上げましょう！」

「宜しく願いますね」

「いやっ、ちよ……！」

何とか逃れようとする紫だったが、丁度今は騎乗位のような体位になっている為、周りの男達にガッチリと肩や太股を押さえ込まれ、いくら動こうが逃れる事が出来ない。

薬のせいで力も入らない……。

動いたせいで水着はすっかりズレてしまい、乳首や大事な部分は最早丸見えであった。

「ひ……ぎ……！」

背後からの文のえぐるようなピストンに、最初は痛みを感じていた紫だったが、徐々に入り口がこなれていき、痛みも和らいでいく。

勿論、追加の薬の効果が効いてきた為もある。あらゆる刺激を快楽に変えてしまう永琳のこの薬は、凄まじい効き

目だった。

「う、ううん……」

紫から口から、痛みとは別の呻きが漏れ始める。その様子を見て、文はニヤニヤと笑みを浮かべ言葉攻めを開始する。

「痛がってたのに、随分と気持ち良さそうねえ。そう言えば紫い、今更だけど……貴女程の人がこないだの永遠亭での計画、気づいてないなんておかしいわよね？ あれ、何か解ってた上で来てたんでしょ。本当はアンタ、相当な変態なんじゃないのお？」

「違っ……本当に、知らな……っ！」

すかさず、藍も紫苛めに混ざる。

「あら、そうなんですか？ エステって聞いて、エッチな想像膨らませてたんじゃありませんか？」

「あ、貴女が持ってたから取り上げたくなっただけよ！

馬鹿な事言わないでっ！」

「ええ……？ 本当にそうなんですかあ？」

「違うに決まってるじゃない！ 私は変態なんかじゃ……」
そこで、くすくすと笑いながら、文と藍が顔を見合わせ

た。

「……？」

紫は咄嗟に二人が何か企んでいるのを察し、不安げな表情を浮かべる。

「変態じゃないですって。この中で一番変態ですよねえ」

「あ……、もう見せちゃっても良いかしら」

「な……何よ……」

藍がその場にあった、大き目の手提げからいくつかのフ

「随分沢山ありますからね、どれから見せたらいいのやら……」

「どれでもいいですよ、本人に自覚がないなら解らせてあげなくちゃですね」

「うふふ、紫様あ」

何枚かの写真を持って、藍が近づいて来る。

何の写真だ……？

身に覚えが無い為、紫は半ばきよんとしていた。

しかし……

「ほら、紫様つてば、こゝろんなもの着ちやう変態なんですもの」

「……！」

藍の持っている大量の写真を見て、啞然とする。

寝ている間に撮られたであろう、様々な衣装で犯される自分の写真……

「や……だ……何、これ……いい、今すぐ燃やしなさい！でない……」

こんな事、起きていたら絶対に許さない……。一体何を考えて、何が楽しくてこんな事をしてるのだ。

紫の中で、一気に怒りがこみ上げてくる。

だが、一瞬にして湧き上がった怒りも羞恥心も、この状況では全く意味を成さなかった。文がニヤニヤしながら、怒涛の紫苛めを開始する。

「でない……何？ イッチャいそう？ 自分のエッチな写真見てイッチャうの？」

「ひ……っ！？」

文の手が紫の陰核に伸び、皮の上からこねくり回す。続けて、更にねちっこい言葉攻め。今の紫の状態なら、

ちよつとした刺激を与えるだけで、恥ずかしささえも快樂に変わっていく筈だ。

藍が目の前に一枚の写真を晒し、文が嬉々として解説を始める。

「すこしくよく撮れてるでしょ。アソコもどアップで撮っちゃった。色も形もハッキリ解るでしょ？ ほら！」

自分の性をまじまじと見せつけられ、紫の顔がみるみる赤くなる。

「いや……あ……！」

それと同時に、全身にぞわぞわと湧き上がる快樂……。薬が本格的に回ってきたようだ。紫の感覚が完全に支配されていく。

「歳のわりに綺麗な色してるのね。それに……こうして見ると、紫のクリって結構小さいわね。触つてるとちゃんとコリコリしてるの解るけど」

「……いい、言わないでえ……！」

「言うに決まってるじゃない、こんな楽しい事ないわよ！

ねえ、この写真のおま○こ、貴女はずっと大事に使ってきたのかもしれないけど、寝てる間に好きにされちゃったのよ？ もういっそ私達のものにさせてよ。好きな時に犯してあげるから。ああ勿論、私たちの好きな時にね」

「……ううう……」

「貴女が嫌がるようなプレイもガンガンしてあげる。泣いて喚いたって絶対に許さないわ。そうそう、ついさっき思いついたのは……貴女を、全裸にして首輪つけて連れまわすの。媚薬をたっぷり飲ませてからね。お尻には犬の尻尾付きパイプでも入れてやろうかしら。それで、おま○こを濡れ濡れにさせた貴女を、幻想郷中散歩させるわけよ！」

皆の前でおねだりしてくれたら、挿れてあげても良いけど……皆どう思うかしら？ すっごく引かれるか、全員にレイプされるか、どっちかよね？ 紫は後者の方がお望みかしら？」

「あ……ああ……あ……」

立て続けに言葉で責められ、最も感じる部分をこねくり回され……紫の中の怒りだとか恥ずかしいだとかいった感情は、全く違うものになっていった。文の鬼畜な言葉攻めにも、紫の身体は反応してしまふ。

全身を電流がかけ巡り、そのどうしようもない位の快樂に悶絶する。

「あ……あ……もう気持ちよくてどうしようもないって感じねえ……、イっちゃっていいのよ？ 二本挿し気持ち良いんでしょ？ ほらあ！」

「……だ、めえ……！」

文が乱暴に腰を動かし始め、紫の身体は更に強烈な快樂に襲われる。

紫自身も、あの薬が効きまくっているのが解る。頭では駄目だと思っている筈なのに、身体がそれをどうしようもなく求めてしまっている。言葉とは裏腹に、全身がそれを欲している。

もっともつと文に触れて欲しい！

お尻もおま○こも、乱暴に突きまくって欲しい！

「あつ……あつあつ……、駄目、何かキちゃうっ！ やめ……」

「ん？ これ、い……じよ、された……ら……！」

「ん？ 何て言ってるか解らないわね」

そこで、文はピタリと動きを止める。

「え……」

「何？ 今やめて欲しいって言ったの？」

紫は赤面した。

やめて欲しい、自分でそう言った筈なのに、肯定の言葉が出て来ない。もうすぐイきそうだったのに、ここで寸止めなんて酷過ぎる……。

「べ、別に……何も」

「ふん、じゃあやめて欲しくないって事？」

「違……」

「なら、やめちやおっかなろ？」

「い、や……意地悪……しないでよ……」

背後から見えなかったが、紫のその泣きそうな声に、文は思わずドキリとする。きつと今にも泣きそうな顔をしている事だろう。自身が更に熱を帯びる。

くそ、ここで『おねだり』をさせるつもりだったのに、こつちがもう我慢出来ない。

文はたまらなくなつて、行為を再開した。

「しようがないわね……！ はあ、はあ……紫い……」

「あつ……んん！ あ……文あ……」

紫は思わず腰をくねらせ、その感覚を堪能する。男のものと、文のものが交互にナ力を決る。段々と動きが激しくなつていき、紫はたまらず嬌声を上げ始める。

一旦おあずけされてしまった為、さつきよりも余計に感じてしまう。無遠慮に打ち付けて来る二人のものが、奥の奥まで届いて来る。一番気持ち良いところが、何度も何度も荒々しく擦られる……！

「うあああああつ！ 凄いつ！ お尻も、おま○こも気持ち良いっ！」

薬のせいで、いつもは嫌うような乱暴な突きが、どうし

いやっ、やめてっ！
駄目え！
出さないでええええー！



ようもなく気持ち良い！

もっと、もっと……激しくして欲しい！ 何も解らなくなる位、めちやめちやにして欲しい！

「すごっ……ナカ、締まるう……！ 紫、いきそうなの……？」
「い……いっちゃう……！ も、私……あああああっ！
イクううう……！」

ビクッビクッと大きく身体が痙攣し、紫は絶叫と共に達してしまふ。その瞬間、紫はぎゅっと文の手を握り、快樂の波に完全に身を委ねていた。

藍も今まで見た事のないような乱れっぷりだった。

いった直後の呆けた表情の紫はたまらなく淫靡で、藍はたまらずに何度もシャッターを切った。

「あああ……はあ、はあ……！」

どうやら潮を噴いてしまったようだ。少量の液体がシートを汚している。

「ん……紫のここ、ヒクヒクしてる……！」

「あんっ、あ、はあ……すご……かったあ……！」

紫は快樂の余韻に浸っているが、まだ挿入している文と男は達していない。

「はあっ、あんっ……待ってて、すぐに私も出してあげるから……！」

「……？」

敏感になっっている紫のナカを、そのまま突き上げる。

「やっ、待って！ 今いったばかりじゃない！ 敏感になっっているのっ！」

「ん……紫ばっかりするいわよ。わ、私だって……！」

イって、少し落ち着いたのか、慌てつつもゆったりとした口調で紫は言う。

「わ、わかったわ、じゃあ一旦抜いて、もう一度し直ししましょ？」

「何もわかってないじゃない、私は今出したいのっ！」

「やっ！ 駄目え……！」

いったばかりで中を擦られるのは、また少し妙な感覚らしい。薬の効果も合わさって、悶絶している。それをまたもや男達が押さえつけ、紫は絶叫するのだった。

「ほら、貴方もナカに出してあげなさいよ。孕ませちゃえば良いじゃない」

「は！？」

どさくさに紛れて何を言い出すのだ、この女は……！

「やだっ、何言ってるんよ変態！ 馬鹿っ！ 文の馬鹿馬鹿……！」

「暴れないで……もうちょっとで、私達も出してあげるから……！」

「嫌ああああああ……！」

どくっ……どくっ……！

紫の中に同時に大量の精液が流し込まれる。敏感になりすぎている紫は、その感覚でさえ感じてしまう。

「あっ……あああ……中に出されちゃってるう……！」

ナカでどくんどくんと脈打つ二つのモノ……流し込まれる暖かい精液……紫は嫌がりながらも、軽く、二度目の

絶頂を迎えてしまうのであった。

文と男がモノを抜くと、紫の中からドロリとした白い液体が流れ出る。その光景を、藍は抜きなく写真に収めていった……



あん...っ

紫い...
好きよ...

ん...文あ

Bust

Bust

Bust

Bust

Bust

Bust

* * * * *

「ひぐ……うつく……」

「あれ？紫、もしかして泣いてるの？」

「…別にっ、泣いてなんかないわよ……っ！」

あの後、男達は帰され、ぐったりとする紫を文が優しく抱きしめていた。

拷問のような快楽から解放され、安心してしまったのだろう。薬の効果もあって、感情がやや不安定になってしまっているのかもしれない。

それにしてもこんな紫を見るのは初めてで、文はたまらず抱擁してしまうのであった。

「ごめんね紫、だって貴女が冬眠から覚めるの、待てなかつたんだもん。寝てる間に出来るスキンシップってコレくらいかな……って」

「……ッ！ 何がスキンシップよ！ あれだけ外道な事しといてよくも……！ 結局はエッチな事したいだけなんじゃないの！」

こうしてベタベタしてきていても、結局は身体目当てで来ているのは解りきっている事であった。

藍もにこにこ微笑みながら、紫の髪を撫でる。

「ほらほら、例えそうだとしても、お陰様で文さんのちん〇も取れたし良かったじゃないですか」

「何が良かったのよ、意味が解らないわ！ あれは元々私がお仕置の為につけてやったのよ！ それが何で……うう、永遠亭で私が油断してなければ、こんな事には……」

「えへへ、ご馳走様でしたらう」

文と藍のお気楽な態度に、紫はイライラを隠せない様子で立ち上がる。

「いい？ 今後、文はここに立ち入り禁止よ。でないと、スキマ送りにするから」

「え……！ 待ってよ、私もう紫無しじゃ生きられないんですけど」

「どうせエッチしたいだけでしょ？ だったら他の娘にして貰えば良いじゃない！」

「違うわよ、だって、私は紫の事本気よ……？」

ふいに文は立ち上がり、紫を抱き寄せると唇を重ねた。「んんっ!？」

深く、深く舌を進入させ、紫の味を堪能する。

紫は最初は面食らった様子であったが、直すにそれに応じ、お互いに舌を絡ませあった。にゆる……にゆちゆ……。

「ふは……」

「……ん、文……」

不覚にもドキドキしてしまい、紫は思わず顔を逸らす。「本当紫ってば良い反応してくれるわね……起きてくれて良かったわ」

「……何よ、本気で私の事……好きだっていうの……？」

濃厚なキスに、紫の心は僅かに揺れてしまった。好意を持たれて悪い気はしない。調子の良い事ばかり言う天狗なんか、信じるつもりはなかったのだが……。

「うん、好きよ……。紫のその、豊富な身体も、締まりの良いアソコもお尻も、それから……」

「…………。け、結局身体が目当てじゃないのよ……！！！！！」

やはり、信じるべきではなかった。

刹那、身体が下に落ちるような感覚がし、気づくと文の身体は地面に打ち付けられていた。

ドサツ。

「いったあゝゝゝ！」

ゴツゴツとした地面の感触。

うす暗い、洞窟のような場所であった。

「ああもう、冗談だったのに……ていうかここ何処よ」

全裸で放り出された文は、怖々と辺りを見回す。どこか見覚えがある場所であった。ここは確か……

「えっ!? うそっ、ここ地底!？」

だとしたら、マズい。色んな意味で相当マズい。

その時、奥の方から視線を感じ、文は驚き振り向いた。

緑色の眼をした、見覚えのある顔……。地上と地下を結ぶ縦穴の番人、水橋。パルスィであった。

「全裸でさえ快楽を得られるその性癖……妬ましいわ!」

「パルスィさん……! あ、貴女本当に何にでも嫉妬しちゃ

うの……!? それでいいの!？」

* * * * *

「あつ、紫しやま! 大丈夫なんですか? なんか……色々あったみたいですけど」

居間でお茶を飲む紫を発見し、橙が駆け寄る。久しぶりに紫に会えて、ほっとしているようだ。にこにここと微笑む

橙に、紫もまた微笑み返す。

「橙! 別に何も無いわ、大丈夫よ。膝においで」

橙が膝にちよこんと乗っかると、紫は（まだ敏感になっている為）ひやっと小さく声をあげたが、気を取り直してその可愛らしい猫耳をふにふにしてやる。

藍にも『お仕置』を命じておいたし、これでやっと平穩を取り戻せる。

「ところで、藍しやまはどこに……」

「ああ、いいのよ藍は。今は人間の里に居る筈だけど、お仕置が済むまで、暫くはクビだから……」

さて、ちゃんと観察してあげないといけないわね……これであの子も懲りてくれるといいんだけど」

その頃、人間の里では……

「おおおおお……これ、は、すごい……」

そこには、人間の里の中でも人の多い、店の並ぶ通りに繰り出そうとする全裸の藍の姿があった。

全裸で人間の里に出没してこいという紫の命で、素っ裸で出てきた方がいいが……。

「こ、これは癖になっちゃうっ！」

紫の意図とは裏腹に、藍は初めての経験に快感を感じていた。自分の裸を、今まで玩具のように扱ってきた人間たちに見られてしまう……。

くやし……でも……ビクビクッ！

「ま……また、冬眠中にヘンな事したら……、同じ事させるぞ、って紫様は仰ってたけど、これは……私にとっては何ぞ褒美ですうっ！」

どうやら藍は、周囲が思っていた以上に変態だったらしい。新しい快樂に出会い、打ち震えていた。

恐らく紫は藍がそばに居る限り、一生穏やかな冬は迎えられるのであろう……。

おしまい

あとがき

最後まで読んで下さって有難う御座いました！

2、3年前までは小説もよく書いていたのですが、最近めっきりご無沙汰だったので、たまには良いかなと軽い気持ちで書き始めたのですが……やっぱり文章を書くのは難しいですね。いつもは漫画ばかり描いているので、良い感じに息抜きにはなりましたが。

イマイチ小説の書き方も把握できていないままで、稚拙な文章で申し訳ないのですが、エロ妄想だけはたっぷり詰め込みました。笑

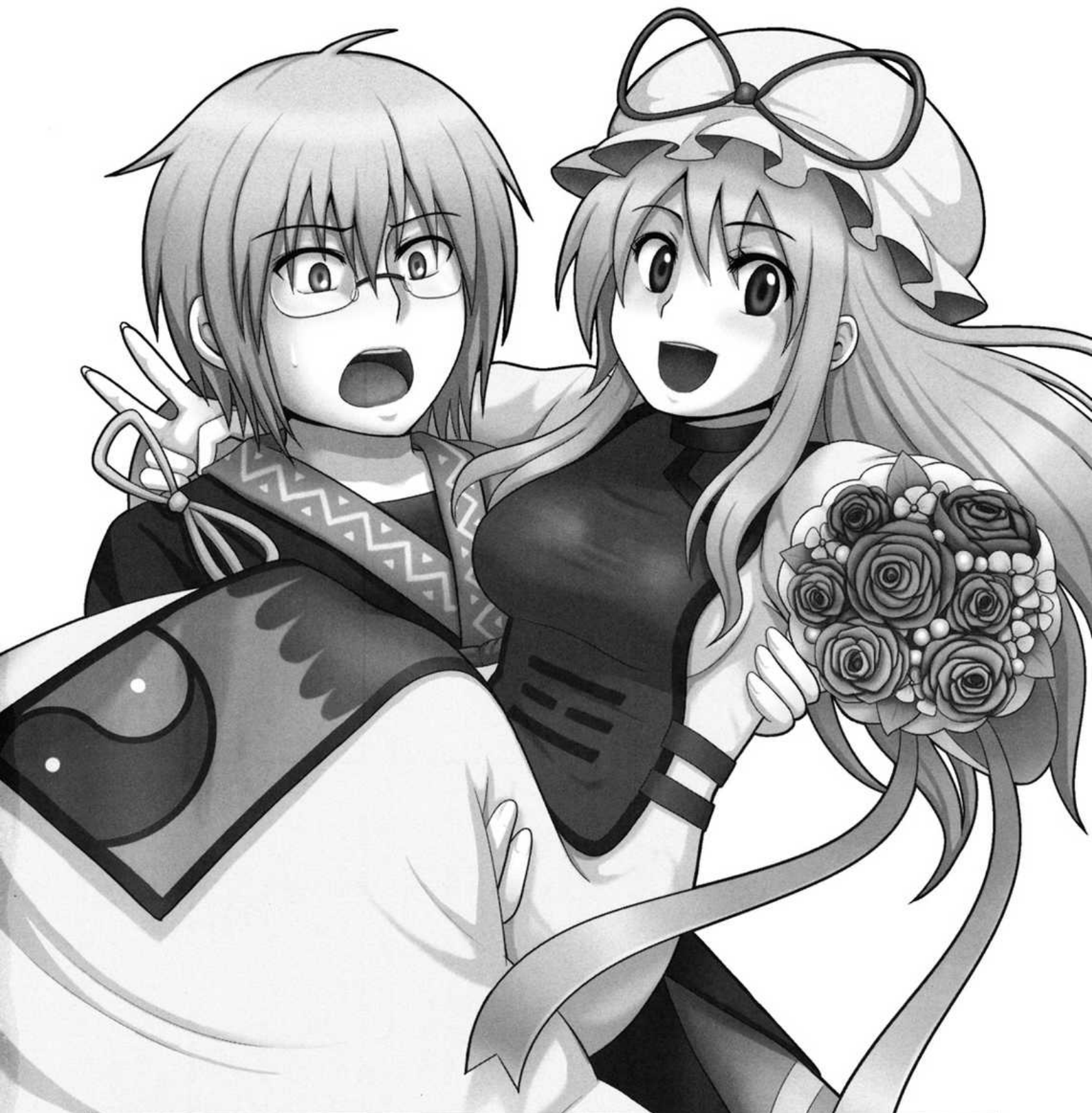
何気に紫に園児服を着せるのにハマっている私です。エロ水着も大好きです。紫は何着ても似合いますね。紫と結婚したい。

境界遊戯もシリーズにするつもりはなかったのですが、何時の間にかここまで続けてしまいました。多分この本で最後になるとは思うのですが、もし全部読んで下さっている方がいらつしやったら、本当に嬉しいです！

なんだかんだで小説書くのは楽しかったので、境界遊戯シリーズ4冊のまとめとして、またちよつとした小説も書きたいとは思っています。サイトにでも載せようかな。

それから次の同人誌は紅樓夢で、こいしとさとのエロ本の予定です。それでは、またお会いできますよう！

かんのいずか



奥

付

発行：少年病監 / かのいずか

ホームページ：<http://www.s-cnet.ne.jp/~scn01000/urabyoutou.html>

発行日：2008年10月05日

印刷：フリーク様
原作：上海アリス幻楽団様



少年病監
presents